

『伊勢物語』 初段における構造的読解について

— 『源氏物語』 若紫巻との対応を中心として —

藤 本 宗 利  
角 田 智 則  
池 田 豊 教

群馬大学教育実践研究 第二十八号  
三三五～三四二 二〇一一 別刷

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター



# 『伊勢物語』初段における構造的読解について

—『源氏物語』若紫巻との対応を中心として—

Tales of Ise in the first stage on structural Reading

—Focusing on the first stage of Tales of Ise and the corresponding volume of Genji Wakamurasaki—

藤本 宗利 (Fujimoto Munetoshi)・角田 智則 (Tsunoda Tomonori)・池田 豊教 (Ikeda Toyonori)

国語教育講座 (Japanese training course)

(二〇一〇年十月二十九日提出)

キーワード：伊勢物語初段 初冠 源氏物語 若紫巻 構造的読解 先行作品 伝統的言語文化

『源氏物語』若紫巻を中心として帚木巻・夕顔巻・末摘花巻の構造的読解を行う。その際、『伊勢物語』初段の構造的読解を先行し、それらの対応関係から見える非対応関係を明らかにする。これにより、高等学校・古典教材における先行作品の重要性を論じる。

## 一 はじめに

平成二〇年一月の中央教育審議会答申の中で、国語科の改善の基本方針として、古典教育に関して次のように提言されていることに、改めて注目したい。「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。」

しかしながら古典教育の現状が、必ずしも「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる」という目的に適っているとは言い難いことも、また事実であろう。特に高等学校における古典教育は、大学受験の突破に目標を据え、古語や古典文法の習得に重点を置いたものとなりがちなことは否めない。

その結果として、古典は受験勉強の対象であって、読んで楽しむ対象ではなくなってしまった。大学の教養教育の講義の折など、受講者の感想などを求めると、毎年度の学部の子生からも、「高校のときは古典が嫌いだっ」とか、「古典文学はおもしろくないものと、ずっと思っていた」とかいう内容のコメントが数多く寄せられる。これでは「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する」どころか、かえって古典嫌いを増加させているようなものである。

もう一つ、古典教育に携わる者として危惧すべき現象がある。それは古典教材の選定が、文章の難易という基準に偏ってなされる傾向があるのではないか、と思われる点である。

たとえば本学部での講義中に、『伊勢物語』の初段を挙げて、高校で教わってきたかどうか尋ねると、学習してきたと答える学生はほとんどいない。その一方で、『源氏物語』の中で今まで読んだことのある部分はどこかと尋ねると、大多数の学生が「雀の子を犬君が逃がしつる……」というところだと答える。

後述されるように、『伊勢』の「初冠」の内容と『源氏』の若紫巻の垣間見の場面とは、深い関係を有するもので、「初冠」の知識を欠落させて若紫巻を読んだところで、本来のおもしろさの半分も味わえないであろう。ところが現実の高校の授業が、このように展開されているのであるとすれば、古典教材の選定にあたって、各作品間の関連性などが、いかに蔑ろにされているかが露呈されよう。伝統的言語文化の「継承・発展」という観点から、改めて古典教材の存在意義が問い返されるべきだと言わざるを得ない。

同様なことは、『枕草子』初段の学習についても認められ、『古今集』に代表される古典和歌の習得をなおざりにしたまま、「春はあけぼの」のみを扱って能事足れりと考えることが、きわめて危険だということについては、これまでも繰り返し発言してきた（東京書籍「かけはし」二〇〇三年一一・一二月号等参照）。見かけ上の「読み易さ」に欺かれて、「春はあけぼの」を初学者向け教材と扱うことは、現在の古典教育の抱える、大きな問題点の一つであろうと思う。

以下の論は、『伊勢物語』初段と『源氏物語』若紫巻との関連性をめぐって、「我が国の言語文化」の「継承・発展」ということを、高校生対象にどう指導していくかを考察するものである。こうした試みが契機となって、真に「生涯にわたって古典に親しむ態度」が育っていったらと、願うところである。

（藤本 宗利）

## 二 高等学校・古典教科書における扱い

『源氏物語』は、現在多くの高等学校・古典教科書で採用されている。一方、『伊勢物語』もまた、多くの教科書で扱われている教材の一つである。この二つの物語が類縁性を持つことは、片桐洋一氏や三谷邦明氏によってすでに論じられている。また、鈴木日出男氏も『伊勢物語』は、物語そのものであるよりも、むしろ物語の型に近いのではあるまいか。そうした数々の型が、『源氏物語』において物語として再生産されたのだとみることもできよう」と源氏物語と伊勢物語の類縁性を論じている。これは、源氏物語が、物語の構造的に伊勢物語に対応する部分が多数存在するためである。特に、伊勢物語初段（初冠）と源氏物語若紫巻との間には構造的類縁性が強く見られ、これを主張している論・注は数多く存在する。また、初段だけでなく、四十一段・四十九段も源氏物語若紫巻と類縁性があると解され

ている。

念のため注記しておくが、ここでは、本当に源氏物語が伊勢物語を意識して綴られたのか、意図されて書かれたのか否かは問題ではない。物語の構造的な対応は、読者に先行する作品のイメージを少なからず抱かせたはずであるということを中心したい。そこには、先行する作品の物語の展開やイメージを基盤とした、推理的読解が存在することとなる。したがって、伊勢物語の物語構造を捉えることで源氏物語の読解を、より豊かなものにできると言える。

しかしながら、現在の高等学校・古典教科書における源氏物語の巻々と伊勢物語の採用段を照らし合わせた場合、対応構造を持ったものが選ばれているとは言いがたい。以下に、平成二十三年度版の高等学校・古典教科書における採用の状況を簡単に記しておく。

現在の高等学校・古典教科書で、源氏物語若紫巻が扱われないことは極めて稀である。若紫巻の採用頻度は、桐壺巻と並びトップであり、次いで、須磨巻・御法巻・薄雲巻と並ぶ。

伊勢物語の採用段は、芥川（六段）・東下り（九段）が最も多く、次いで筒井筒（二十三段）、その次に初冠（初段）・狩の使ひ（六十九段）・つひにゆく道（百二十五段）が並ぶ。

この採用状況からわかるように、若紫巻が採用多数であるにも関わらず、構造的に類縁性のある伊勢物語初段は、あまり扱われていないようである。

本稿では、伊勢物語初段と、源氏物語若紫巻の構

造的分析を行い、対応関係を明らかにするとともに、非対応関係についても抽出する。これによって、源氏物語の教材としての読解を深めていくことを目指すこととする。また、それらの分析を通して、伝統的言語文化の継承と発展にかかわる授業実践についての考察を行うものとする。

### 三 伊勢物語初段の構造と源氏物語の対応

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

（伊勢物語・初段）

伊勢物語初段には、「男」が、「奈良の京春日の里

もしくは「ふる里」にて、思いがけず「なまめいたる女はらから」を「かいまみ」し、物語が展開するという構造を見てとれる。近年では、島貫明子氏がこの伊勢物語初段の構造的分析を試みている。

この段の要素は、「初冠」した「男」が、「春日の里（ふる里）」に「狩」に行き、「いとなまめいたる女はらから」を「かいまみ」して、「いちはやきみやび」を行うということである。（中略）

第二に、「春日の里」、即ち「ふる里」であるが、ここでは旧都の意である。都が移ったためにかつてに繁栄が失われ、さびれてしまった土地であり、そこには寂しさと、懐かしさが立ち籠めている。

第三に、「なまめいたる」は、動詞であるが、形容詞的な使い方、「完成された美ではなく、懐かしく心ひかれる優しさ、忘れることができないう品な優しさを持った」女性の意という解釈がある。

第四に、「女はらから」の問題である。「はらから」はもともと同腹のきょうだいを指すが、異腹のきょうだいを指す言葉である。「女はらから」の解釈としては、

（一）男の異性のきょうだいであり、一人である。

（二）姉妹であり、二人である。

の二通りが考えられるが、一般的には（二）の

説に解されている。

この鳥貫氏の分析によれば、伊勢物語初段は、①【初冠したの男】が、②【寂れた土地】あるいは【現在の生活空間から隔絶された場所】において、③【美しい女性】を④【垣間見する】という構造を持つていけるとらえることができる。そして、このような構造は、源氏物語若紫巻にも見ることができ。以下、若紫巻における垣間見の場面を引用する。

日もいと長きにつれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持

仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱の寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みぬたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらきふくよかに、まみのほど、髪の毛のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりまよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊び。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの姿えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろ

げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の、心なしのかかるわざをしてさいなまるこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけれ」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。小納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

(源氏物語・若紫)

これは、源氏が北山において、美しい童女(後の紫上)と尼君を垣間見する場面である。この場面は、①【源氏】が②【北山】すなわち【源氏の生活空間から隔絶された場所】において、③【「ただ人と見えない尼君」と「いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌」の女子】を小柴垣から④【垣間見する】という構造を持つてい。若紫巻と伊勢物語初段の①―④の対応関係から、若紫巻の構造が、伊勢物語初段の構造と類似していることがわかる。

このように、伊勢物語初段と源氏物語若紫巻が構造的類似性を持つていることを理由の一つとして、源氏物語が伊勢物語を先行作品としているという指摘がなされている。また、若紫巻だけではなく、帚

木巻や末摘花巻においても伊勢物語を前提としていふと思しき表現が見える。以下、帚木巻および末摘花巻の引用である。(傍線は筆者による。)

忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、

(源氏物語・帚木)

帚木巻の冒頭の一節である。ここで言う「忍ぶの乱れ」が、伊勢物語初段を引用していることは、諸注一定している。また、この帚木巻の一節について、伊藤博氏は、以下のように論じている。

光青春の物語の始発をなす帚木巻で主人公光は「まだ中将などにもしたまひし時」と「中将」なる官職をまつて登場し、爾後第八巻花宴までの恋愛絵巻の展叙において一貫して源氏の中將として立ち現れる。伊勢物語が「在中將」(更級日記)とか「在五中将の日記」(狭衣物語)などと呼ばれ、昔男Ⅱ在五中将として受け取られていたことを思えば、「すぎことども」にまわられた中将光の物語と勢語との類縁性はこの呼称によっても表示されているといえよう。帚木巻の叙述は主人公光の対女性におけるあやにくな本性を語りつつ「しのぶのみだれやと疑ひきこゆることもありしかど、……」と前掲勢語初段歌を引用して昔男の影を喚起し、さらには続く雨夜談義で女性体験の蘊蓄を語って主人公

の指南役となる「ものよくいひとほれる」「世のすき者」の官職を「左の馬頭」と設定して、昔男のもう一つの、おそらくは壮年以後の官職たる「右の馬頭」のイメージをだぶらせる。

伊藤氏の指摘によれば、源氏の「すきごとども」の出発点としての帚木巻には、伊勢物語初段との多くの対応関係を見ることができ。おそらく読者は、帚木巻以下に展開するであろう「いちはやきみやび」を想起させられたであろう。

いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれなど思ひつづけても、ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。

(源氏物語・末摘花)

末摘花巻の一節である。源氏は、身寄りもなく寂しい様子で過ごしている故常陸宮の遺児を不憫に思うと同時に、興味を持ち、その屋敷に訪れる。その時にふと、「昔物語」が思い出されるのである。「いといたう荒れわたりてさびしき所」には、「あはれなることども」があるに違いないと思つた源氏の思ひは、末摘花の容姿の醜さという結びを伴って鳥辭物語的に収束していく。ここでは、「昔物語」の存

在がこの鳥辭的要素の加速装置として働き、一層の滑稽さを演出していると言える。また、「あはれなることども」が、【人】ではなく【こと】であるのは、やはり「いちはやきみやび」の連想が働くが故の描写ではないだろうか。

同様の構造も持つ描写は、帚木巻にも見える。

さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえぬ。いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなむあやししく心とまるわざなる。

(源氏物語・帚木)

この帚木巻の描写は、【さびしく荒れ果てた場所】で、思いがけず【美しい女性】を発見するという典型を語っている。帚木巻や末摘花巻において、特筆すべきは、このような「昔物語」の典型が一般論として語られている点である。ここから、「昔物語」が、「いちはやきみやび」の起点として働くという、人々の認識の前提を読み取ることができる。

以上の引用部から、源氏物語が伊勢物語初段と構造的な対応を持っていることがわかる。また、源氏物語が伊勢物語を先行作品として展開されていることがわかる。

#### 四 構造的対応関係の分析

源氏物語には、伊勢物語初段の構造に類縁性を持つものが、多数存在する。帚木巻、夕顔巻、若紫巻、末摘花巻がそれに当たる。ここでは、それぞれの対応関係を分析することで、非対応関係を明らかにしていく。また、分析を行う上で、以下の対応関係を明らかにする。

- ① 主体
- ② 主体の状態
- ③ 場所
- ④ 客体
- ⑤ 物語の展開

##### (一) 伊勢物語初段

- ① 昔男
- ② 初冠・狩
- ③ 「奈良の京春日の里」・「ふる里」
- ④ 「いとなまめいたる女はらから」
- ⑤ 贈歌。「いちはやきみやび」を行う。

##### (二) 源氏物語帚木巻

- ① 光源氏
- ② 方違え
- ③ 紀伊守邸
- ④ 空蟬・軒端萩
- ⑤ 空蟬と一度共寝するが空蟬への想いは実らず

## (三) 源氏物語夕顔巻

## ① 光源氏

## ② 大弐の乳母の見舞い

## ③ 六条あたりのむさ苦しい界限

## ④ 夕顔

## ⑤ 夕顔が物の怪にとり殺される

## (四) 源氏物語若紫巻

## ① 光源氏

## ② わらはやみ(わらはやみ語)の治療

## ③ 北山

## ④ 若紫・尼君

## ⑤ 若紫を引き取り、後に妻にする

## (五) 源氏物語末摘花巻

## ① 光源氏

## ② 姫君に対する同情、興味

## ③ 「いといたう荒れわたりてさびしき所」

## ④ 末摘花

## ⑤ 醜い容貌の末摘花に驚嘆する

この(二)―(五)の構造と(一)の構造を照らし合わせたときに浮かび上がるものは、決して「いちはやきみやび」ではない。(二)―(五)は、物語構造的には(一)の型に類似してはいるものの、源氏、あるいは姫君のその後の展開が、(一)と微妙にずれていつている。特に、(二)においては、

対応している一つ一つの事柄に微妙なずれが生じている。三谷邦明氏によれば、(二)に(一)と対照的な構造を持たせることによって、むしろ滑稽さが演出されているのである。

源氏物語の読者が、(二)―(五)に(一)の構造を読み取ったとき、その後の展開に伊勢物語初段の「いちはやきみやび」を期待するであろう。しかしながら、物語の筆は、それとは別の方向に舵を取る。期待を持ちながら、あるいはある程度予想をたてながら物語を追っていた読者を見事に裏切る構造を持っているのである。また、(二)のように対照的な事柄をあえて対応させることによって、むしろ滑稽さが演出されている場合もある。

この構造的読解は、(一)―(五)を系統的に読解していくことよって初めて可能になることである。これは、源氏物語の巻々を単一に扱うことでは見えにくいことであり、さらに伊勢物語初段の構造理解無しにはたどり着くことさえ難しい読みである。

この微妙なずれや対照関係を学習者はどのように感じるであろうか。源氏の失敗談と捉えるであろうか。または、源氏の若かりし頃の儂い恋物語と捉えるであろうか。もしくは、恋多き源氏の自尊談と捉えるだろうか。いずれにしてもこの構造的読解は学習者の読解を揺さぶり、豊かな発想を生むきっかけをつくることのできるのではないだろうか。

## 五 構造的読解を扱う授業実践について

本稿はこれまで、若紫巻を中心に伊勢物語初段と源氏物語との構造的対応関係を分析してきた。このように物語の構造が受け継がれていることを授業で扱うことを通して、伝統的言語文化の継承と発展を学習者に意識させることができるのではないだろうか。しかしながら、構造的読解をするためには、源氏物語と伊勢物語を現代語に置き換えてとらえるという段階を経なければならぬ。そのため、学習者に古語から現代語へという言語のフィルターがかかってしまい、非常に難解なものに見えてしまう可能性がある。したがって、授業の導入部分では、学習者の周辺における【先行作品を持つ作品】の例を提示し、【先行作品を持つ作品】というものを身近に意識させる必要がある。なお、本稿では【先行作品を持つ作品】を【継承作品】と呼称することとする。

先行作品を持つ物語は、源氏物語だけではない。さらに言えば、古典のみが先行作品を持ち得るのではない。現代の小説や漫画など、物語の綴られた時代や形態を問わず、先行作品は存在するのである。

現代の物語創作の方式として、「二次創作」というものがある。これは原典となる作品の世界観を踏襲しつつ、原作とは違ったストーリーを描く創作方式である。この「二次創作物」の中で、登場人物達は、原典である作品中のセリフや言い回しを巧みに利用し、原典を読者に意識させながら物語を展開し

ている。つまり、「二次創作」は、原典を先行作品に持っているのである。また、小説や漫画、現代の歌の歌詞にも先行作品を持つものが多数存在する。

このように、学習者の周辺には、【継承作品】が存在している。古典の授業を行う際、まずは身の回りの【継承作品】の存在に気づかせ、意識させることが重要である。その上で、源氏物語と伊勢物語の対応性を見出すことが効果的である。

## 六 記号的読解を扱う授業実践について

構造的読解は、語句の対応といった記号的読解その基礎としている。いくつかの対応する記号の集合が、構造をなすのである。そのため、本稿では、記号的読解に関する授業導入についても触れておく。

【歌枕】に代表されるように、一つの語句はただ一つの意味を提示するだけのものではない。語句は、それに対するイメージや風景を読者に暗示する効果を持つ。この観点から伝統的言語文化の継承の可能性を模索したとき、童謡や民謡、唱歌の中に多くの記号が隠されていることがわかる。

例えば、「もみじ」という唱歌の歌詞には、【もみじ】、【川の流れ】、【錦】などの語句が見える。これらの語句は、「古今和歌集・仮名序」における記述が典拠となつていると思われる。

秋の夕べ、龍田河に流るる紅葉をば帝の御目に  
錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麿が  
心には雲かとのみなむ覚えける。

(古今和歌集・仮名序)

「もみじ」の作詞者が古今和歌集・仮名序を参考に作詞をしたのかどうかの問題ではなく、秋の構造を形成する記号を古今和歌集が編まれた時代から、継承していることが重要なのである。また、古今集に限らず、現代の歌謡曲の歌詞にも和歌などから継承されている記号が存在する。そのため、学習者の身近な歌謡曲を授業の導入に取り入れ、意識付けを図ることができる。また、この記号的読解を学習者に意識させることで、構造的読解へと発展させるきっかけをつくることのできるのである。

## 七 結び

源氏物語の主人公は、決して思い通りの展開を得られているわけではない。三谷邦明氏も指摘しているように、源氏物語若紫巻と伊勢物語初段の対応関係により浮き彫りにされるのは「いちはやきみやび」ではなく、むしろ滑稽さであろう。この読みは、源氏物語若紫巻単独の読みではなしえない。伊勢物語初段を経由することではじめて見えてくる読解である。

本稿では紙面の都合上触れることがかなわなかったが、伊勢物語四十一段・四十九段を経由すること

により、桐壺・藤壺・紫上をつなぐ【紫のゆかり】のラインを浮き彫りにすることができ、これにより、源氏の心情をより深く考察するきっかけをつくることのできる。また、夕顔巻を経由して末摘花巻を扱うことにより、なぜ源氏が末摘花に強く固執したのかを考えるきっかけをつくることのできる。

源氏物語の巻を単一で読解することは、もちろん可能である。文法的解釈を温床とし、古語解釈を連ねていけば、そこに書かれている古語を現代語のように読めるであろう。しかしながら、源氏物語は【物語】である。物語には流れが存在し、布石が存在する。そしてその流れや布石は、しばしば、過去に描かれた物語を温床とすることがある。過去に描かれた物語が有名であればあるほど、その描写は一般化し、定型化する。この定型を知って読むのと知らずに読むのでは、必然的に物語の理解の質が変わってくるのである。源氏物語と伊勢物語はまさにそのような関係にあると言える。

したがって、高等学校での古典の授業において、先行作品を読んだ上で継承作品の読解をしていくことは重要であると言える。それが引いては伝統的言語文化の継承と発展に寄与することに繋がるのではないだろうか。

(角田 智則)

## 引用・参考文献

片桐 洋一 「源氏物語における伊勢物語―その影響と方法 についての覚え書」『国文学』1968・5

- 三谷 邦明 「藤壺事件の表現構造―若紫巻の方法あるいは  
 〈前本文〉としての伊勢物語」〔『物語・日記文学  
 とその周辺』1980・9）
- 大朝 雄二 「伊勢物語初段の「かいま見」と源氏物語」  
 〔『中古文学』1985・5）
- 鈴木日出男 「作品の表層と深層―伊勢物語の表現」〔『国文  
 学・解釈と教材の研究』1985・7）
- 増田 繁夫 「昔男―伊勢物語主人公の誕生」〔『国文学・解  
 釈と教材の研究』1985・7）
- 伊藤 博 「源氏物語から見た伊勢物語」〔『国文学・解釈  
 と教材の研究』1985・7）
- 鳥貫 明子 「源氏物語における伊勢物語の影響―「女はら  
 から」の問題をめぐって」〔『緑岡詞林』199  
 3・3）
- 佐藤 敬子 「若紫の巻のかいまみ―仙窟・伊勢物語初段と  
 の引用関係を中心として」〔『論究』1993・  
 4）
- 佐竹 純一 「源氏物語における伊勢物語引用「若紫」の巻  
 と伊勢・二・四段」〔『中央大学国文』200  
 2・3）
- 今西祐一郎 「中世伊勢物語と『源氏物語』」〔『説話文学研究』  
 2009・7）
- 源氏物語 『新編 日本古典文学全集』阿部秋生・秋山  
 虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館（199  
 4・3）
- 伊勢物語 新編 日本古典文学全集』片桐洋一・福井貞  
 助・高橋正治・清水好子 小学館（1994・  
 12）
- 三谷 邦明 『源氏物語彙糸』 有精堂（1991・10）

（ふじもと むねとし・つのだ ともりのり・いけだ とよりのり）